

鎌倉楽しむ会

鎌倉の晩秋の

名越街道

日蓮聖人 ゆかり 所縁の
本覺寺、妙法寺、
安国論寺、長勝寺
を巡る

(スタート) 鎌倉駅 10時

平成27年 11月 18日

本覺寺 (ほんかくじ)



● 永享8年(1436)日出上人の
よって創建された。二代目住持の
日朝上人は、後に身延山久遠寺
の住持になった際、かの地にあつ
た日蓮聖人の遺骨を本覺寺に分
骨する。それは身延に参詣するこ
とが難しい女性や老人のためで
あり、本覺寺が「東身延」と呼ば

れるきっかけとなった。

● なお、寺には、江戸時代・
寛政の改革を断行した老中の
「松平定信」筆の「東身延」の
額も伝わっている。

● 眼の病気を治してくれる
寺として知られ、「日朝さま」
の愛称で親しまれている。日
朝上人が眼の病気を患ったと
き、法華經と自らの回復力に
よって治癒したというのが、そ
の由来である。境内に建つ
「夷堂」は、縁結びや商売繁
盛の神様として参拝客が多
い。

妙本寺 (みょうほんじ)



● 文応元年(1260)開基は比企能本
で、開山は、日蓮聖人として創建された。
ここは*「比企の乱」で知られる比企一
族の邸宅跡である。能本は日蓮聖人に帰
依して能本の邸を喜捨した。
● 日蓮上人が身延に隠遁すると、直弟
子の日朗上人は、ここを拠点に布教を行

い、やがて同寺は日郎門下の
拠点として信仰を集めた。日蓮
宗の格式高い寺として、代々の
住職は昭和22年まで東京・池上
本門寺の住持を兼務していた。

● 境内には、二代將軍
「源頼家」の正室「若狭局」
をまつる蛇舌止堂、比企一族の
供養塔や、頼家と若狭局の子
で、わずか六歳で命を落とした
「一幡」をまつる袖塚などがある。
杉林に囲まれた広い境内は
サクラやカイドウが美しく、祖師
堂の脇から、祇園山ハイキング
コースに抜けることもできる。

常栄寺 (じょうえいじ)



● 寺が創建されたの
は慶長11年(1606)「ぼ
たもち寺」という呼び
名で親しまれている。

その由来は、文永8年
(1271)9月12日、日蓮
聖人が竜の口の法難
があつたとき、裸馬に
乗せられ鎌倉の市中を
引廻されていたと
き、この地に住む媼
が、日蓮聖人の前に進
み、ゴマの餅を捧げた
という話が伝わる。そ
して、日蓮聖人は奇跡
により処刑を免れたこ
とから、後に「頸つぎの
ぼた餅」という逸話が
生まれた。

別願寺 (べつがんじ)



● 宗派は「時宗」。藤沢山
清浄光寺(遊行寺)末。開山は
寛阿公忍。弘安5年(1282)、公
忍が一遍上人に帰依し、真言宗
から時宗に改宗し、能成寺の寺
号を、別願寺とした。鎌倉におけ

る時宗の中心となり、室町
時代は足利家一族が信仰
し、鎌倉公方足利家代々の
菩提寺として栄えた。

● 天正19年(1591)には
徳川家康からも寺領を寄
進され寺勢を誇つたが、江
戸時代以降、次第に衰微し
た。境内に残された「足利
持氏」の供養塔といわれる
大きな石の宝塔は当時の
栄華を物語る。大正期には
作家・広津和郎が一時下宿
していた。

安養院 (あんよういん)



● 宗派は浄土宗。開基は北条政
子。嘉禄元年(1225)、政子は源頼
朝の菩提寺として笹目に長楽寺を
建立。しかし、正慶2年(1333)の幕
府滅亡のときに焼失。現在の地に
あつた浄土宗善導寺も幕府滅亡の
際、焼失したため、笹目の焼失した

長楽寺をこの地に移し、一つに
して安養院とした。安養院は政
子の法名。本堂の裏手に二基の
宝篋印塔があり、大きい方は善
導寺開山の尊観の墓といわ
れ、現存する最古の石塔で国
の重要文化財。小さな石塔は北
条政子の供養塔である。

● 鎌倉のツツジ寺として人気
のある安養院。(画像は満開のオ
オムラサキ)5月の連休ころに
は、通りに面した生垣が赤紫色
に染まり、約五十株のオオムラ
サキが五月の青空に映える。

上行寺(じょうぎようじ)



- 正和2年(1313)の創建。日蓮上人の創建。日蓮宗。本堂は明治19年妙法寺の法華堂を移築したものといわれる。
- すべての病、特に瘧に効があるとされる瘧守稲荷堂と、鬼子母神をまつる薬師堂がある。
- 桜田門外の変で井伊直弼を襲撃した広木松之介がかくまわれていたが切腹。石碑がある。

妙法寺(みょうほうじ)



- 建長5年(1253)日蓮上人の開山、山号は楞嚴山。鎌倉での布教に乗り出した日蓮聖人が草庵を結んだ地で、「松葉ヶ谷の法難」の舞台となった地の一つ。創建は建長5年(1253)。護良親王の遺児で幼名・楞嚴丸、後の日蓮上人が、亡き父の

菩提を弔い、また宗祖・日蓮聖人の遺蹟を守るために、この寺を再興した。境内には、日蓮上人が植えたといわれるソテツや御小庵跡、日蓮上人とその母・南の方の墓もあり、山頂にある護良親王の墓からは市街地と海を一望することができる。しっとりとした緑に包まれた境内には、細川家の寄進による本堂や、水戸家が寄進した法華堂などが建ち、江戸時代には大名や江戸城大奥の女人たちの信仰をあつめていたという。

安国論寺(あんこくろんじ)



- 寺域一帯を松葉ヶ谷といい、建長5年(1253)、安房から鎌倉に入った日蓮聖人が初めて庵を結んだ場所として知られる。日蓮上人は、およそ20年をこの地で過ごし、その聖跡が寺となった。日蓮聖人が鎌倉に入った当初、道場とした「御法窟」または

「日蓮岩屋」という岩窟がある。「立正安国論」はここで書かれた。熊王尊殿脇の石段を登ると日蓮上人が日々、富士山に向かって法華経を唱えたという富士見台がある。さらに山道を行くと、「松葉ヶ谷の法難」の際に山王権現の使いとされる白猿の導きで難を逃れたという「南面窟」がある。境内には、日蓮聖人桜の枝が根付いたといわれる妙法桜やサザンカ、カイドウの巨木はいずれも市天然記念物。

日蓮乞水(にちれんこいみず)



- 水に恵まれていない鎌倉だが、なかでも質の良い清水が湧き出る泉を五名水とし、観光名所とした。「新編鎌倉志」には、「鎌倉に五名水あり」として「日蓮乞水」の記載がされている。その鎌倉五名水の一つに数えられているものである。日蓮上

人が建長5年(1253)に安房から名越切通を超えて鎌倉に入られたときに、辺りで水を求め杖を地面に突き刺すと、ここから清水が突然湧き出し、以降日照りのときも水がこんこんと流れ出て涸れることがなかったといわれる。

- 鎌倉五名水
1 梶原太刀洗水
2 金龍水(現在存在しない)
3 銭洗水(佐助銭洗并財天)
4 不老水(現在存在しない)
5 日蓮乞水

長勝寺(ちょうしょうじ)



- 日蓮聖人の「松葉ヶ谷の法難」の跡という伝承が伝わる。日蓮聖人に帰依していた石井藤五郎長勝が、流されていた伊豆から鎌倉に戻った日蓮聖人のために結んだ庵を寄進、これが寺の起源となった。
- 境内に入ると、高村光雲作の巨大な

日蓮聖人像に迎えられる。背後に建つ帝釈堂は、日蓮聖人が帝釈天の使いである白猿に助けられたことから、帝釈天ゆかりの霊場とされている。

- 法華三昧堂は県重要文化財で、鎌倉時代特有の五間堂という建築様式の貴重な建物である。
- 毎年2月11日に行われる「大國禱会成満祭」は、よくマスコミ、テレビにも放映される鎌倉の厳寒の風物詩の一つとなっている。



- 「大國禱会成満祭」は千葉県にある中山法華経寺での百日間の荒行を終えた僧たちが、満願を祈念しここで冷水を頭から浴びる荒行を行うことである。

参考文献:鎌倉の寺小辞典・鎌倉文化
観光検定テキスト

鎌倉楽しむ会

鎌倉の晩秋の

名越街道

日蓮聖人 ゆかり 所縁の
本覺寺、妙法寺、
安国論寺、長勝寺
を巡る

(スタート) 鎌倉駅 10時

平成27年 11月 18日

八雲神社 (やくもじんじゃ)



- 社伝によれば、永保年間(1081～84)、新羅三郎義光が兄・八幡太郎義家の奥州攻め(後三年の役)の助勢に赴く途中に、この地に立ち寄った際、疫病に苦しむ人びとの姿を見て、京都祇園社の祭神を勧請したのが始まりという。祭神をお

祀りするとともに悪疫は退散し、民は難を逃れ安堵したと伝えられる。

- 応永年間(1394～1428)、佐竹屋敷に祀られていた祠が合祀され佐竹天王と称した。佐竹氏は新羅三郎義光の子孫で代々、源氏、足利氏、豊臣氏に仕えた大大名であった。その後も「祇園さま」と崇められ、江戸時代も代々の徳川将軍家より朱印を賜った。
- 明治維新の際、社号を鎌倉祇園社から八雲神社に改称した。
- 宝蔵庫には江戸時代の神輿四基、宝剣、銅鏡などガラス越しに拝観できる。

足利持氏供養塔



- 上の画像は、「別願寺」にある高さが3あしかがもちうしmを超す、足利持氏の供養塔(市文)です。この供養塔には四方に鳥居が浮き彫りされているが、これは持氏の怒りを鎮めるためと云われている。
- 足利尊氏の室町幕府は、長男の「義よし註あきら」を後継者にして、次男基氏が鎌倉へ

貞和5年(1349)に派遣され、以来基氏の子孫が鎌倉府の鎌倉公方となり、上杉氏が代々関東管領を務めることとなる。

- 持氏は12歳で鎌倉公方の座についた。成人になるにしたがって京都・室町幕府と対立するようになり、永享10年(1438)箱根・足柄で両軍は激突。持氏軍は敗れ、持氏は自害に追い込まれた。42歳であった。

大寶寺 (だいほうじ)



新羅三郎義光



- 源(新羅三郎)義光は、父・頼義の三男で、大津園城寺(三井寺)の新羅大明神で元服したことにちなんでいる。兄の義家は石清水八満宮で元服、八幡太郎義家と呼ばれ、次兄の義綱は京・賀茂神社で元服し、賀茂次郎義綱と称していた。
- 兄の義家とは15歳以上も年の離れた兄弟であり、二人の兄の武名の陰に隠れて、官途に就くのが遅く、永保3年(1083)頃、左兵衛尉になった。
- 応徳3年(1086)には「後三年の役」が起り、兄の義家が清原清衡の助勢に赴くが、苦戦をしていた。兄・義家の苦

境を知った義光は義家の援軍として出陣することを朝廷に願出でるが勅許を得られなかった。やむを得ず、官職を投げ捨てて、義家の軍に参陣した。

- 義光は「後三年の役」で武功を立て、出世して刑部丞となって、また、常陸介に任じられ、佐竹郷を領して常陸北東部に勢力を伸ばし、地盤を固め、孫の「昌義」の時代になり「佐竹氏」を名乗ることになった。尚、このほかに武田氏、小笠原氏、南部氏なども義光の子孫であるという。